

研究論文

西田幾多郎の思想形成¹⁾

ある家庭事情の深淵

池田善昭²⁾

The Background of the Original Thoughts Formation in Kitaro Nishida

IKEDA Yoshiaki

The original thoughts in Kitaro Nishida was made clear up to the present only from the view point of his achievement, that is to say, many philosophical papers. Scinse his technical terms was so much more difficult than the common language of the Western philosophy, our understanding on his thoughts tends often to be extreme idealistic. Namely, it has no concreteness.

Nishidaism, so called Nishidatetugaku is founded on his life more strictly than mere his learning or thoughts. While he was young, he devoted himself to Zen Buddhism for his calm life, because he had too serious domestic trouble und his future uneasiness. He had undergone a mental conflict between his father und him.

But, if anything, the trouble und uneasiness led him to his absolute resignation. Now we would rather make a study of his life-history than his thoughts.

Key words : (calm) Life, Life-history, Zen Buddhism, Absolute conflict

キーワード : 生活, ライフ・ヒストリー, 禅仏教, 絶対的葛藤

はじめに

われわれは、一般に、学問のために学問をし、哲学のために哲学をしている。しかし、それは、あくまでも表面上のことである。その背景にまで踏み込むと、ひとは、己の心や生き様のために学問や哲学をしているのである。目的と手段を取り違えない基本の姿を忘れがちである。西田幾多郎の思想に触れるとき、その基本の姿を想起させられる。

若き西田は、明治36年7月、33歳のある日

の日記に、次のように書き記している。「余は、禅を学の為になすは誤りなり。余が心の為、生命の為になすべし。見性までは、宗教や哲学の事考えず」とあり、また別の日には、「学問は、畢竟leifのためなり、leifが第一等の事なり、leifなき学問は無用なり」(leifはもちろんlifeのこと)とある。西田にすれば、学問に先駆けて禅があり、禅に先駆けて「ライフ」があるのである。ことの重大性に気付いたこの日の日記を挟む明治31年から明治39年1月までの西田の生活を見ると、座禅に打ち込む記録が非常に頻繁に登場する。特に36年8月3日、「無字」の公案が通過するまでの6年間は、朝打座、昼打座、夕打座といった座禅の記述の連続であり、

1) 本研究は、立命館大学人間科学研究所における2000～2002年度プロジェクト研究B(西田幾多郎のライフヒストリー研究)の成果である。

2) 立命館大学文学部

日記の文面から、西田幾多郎のお孫さん上田久氏（西田の長女彌生の長男）の言い方を借りれば、たしかに「鬼気迫る思い」（『祖父西田幾多郎』南窓社・112頁）がする。われわれは、命懸けで座る西田の姿に胸打たれるのである。

西田の日記を読む者にこうした思いをさせるのは、多分、彼にとって、学問も禅も、すべて彼の「ライフ」のためであったからである。まず、「ライフ」をなんとかするためにこそ、禅があり、「ライフ」をなんとかしてはじめて、宗教も哲学も考えることができる、というのである。西田にとって、当時、禅は彼の「ライフ」そのものであって、宗教といえるものではなかった。禅を宗教の範疇に入れないというのは、とても面白い。何が、一体、彼をしてこれほどまでに「ライフ」に思いを凝らすのであろうか。先の日記にあるごとく、彼がライフを「第一等」と宣言する背景には、それ相応の理由があつてのことである。それは、彼の容易ならざらん生活を意味していた。

そこで、彼の生活について具体的に考察してみようと思うのだが、それ以前にすでに彼の築いた「西田哲学」と称せられるものの中に、彼の生活の匂いが漂い、熾烈なまでの魂の苦悩の叫びが聞こえてくるように感じられる。そこで、その思想が晦渋であるとするれば、それだけ彼の生活は、苦悩においてその深さが深かったことを示している。思想形成の背景には、そこに潜む極めて深刻な彼の生活があつたのである。

彼の「哲学」には、生活の場面ないし生き様との取り組みと切り離し得ない観点があるように思う。この「ライフ」の観点こそ、彼の思索の類い稀なる魅力となつて、読者を彼の「哲学」に引き付けるのではないかと思われる。われわれのこの度の共同研究で、西田幾多郎の思想形成を彼の「ライフヒストリー」の立場から取り上げようとしたのも、実は、研究主題のモチーフが、哲学における「ライフ」の本質を明らか

にするためであつた。若き西田のいう「ライフ」とは、いかなる生活であつたのだろうか。

西田幾多郎という人物は、生涯、己を絶望のどん底に突き落とす生活境遇からたえず這い上がらなければならなかつた。彼の苦悩に満ちた人生の中で、己の心が引き裂かれるあまり、つまり、己の絶望のどん底の深さのあまり、彼は、彼の言う「真正の己」を見失い、「自家の安心」にやすらうまで、見失われたその「真正の己」を探し求めざるを得なかつたのである。哲学という営みは、見方によれば、そのための結果論に過ぎないものであつた。所謂「哲学」のために座禅するのではなかつたように、哲学のために「真正の己」が求められたわけでもなかつた。それでは、一体、なんのためにか。「ライフ」のためにであつた。

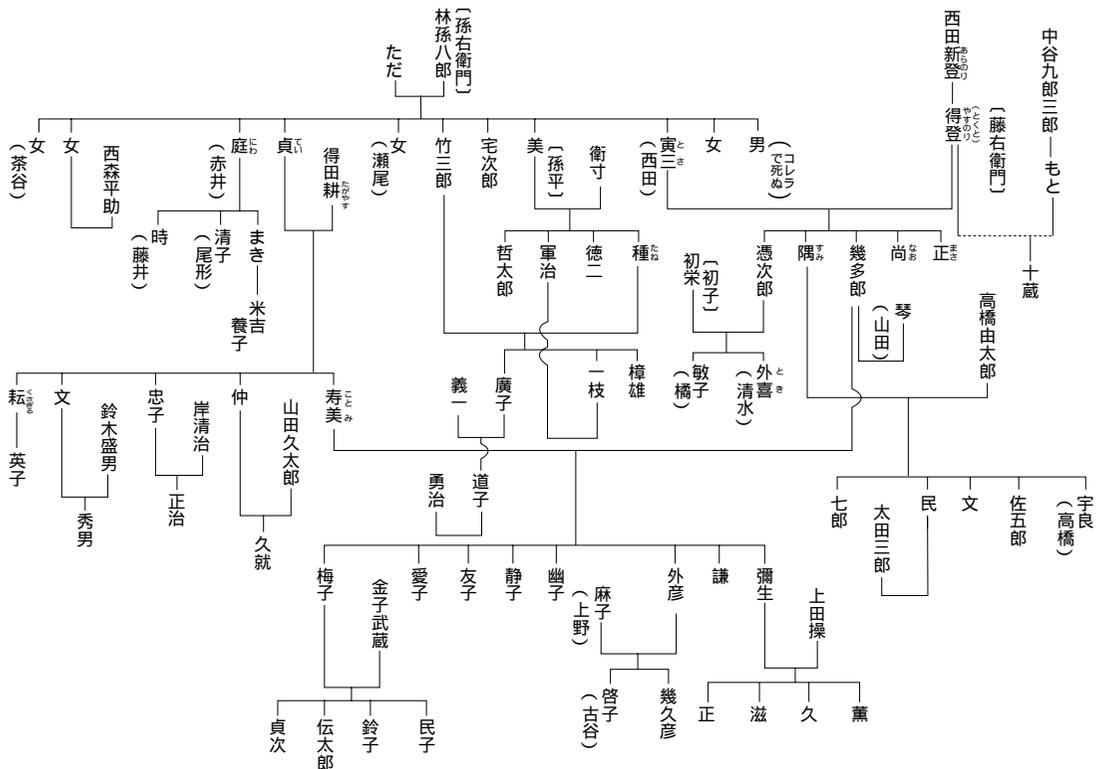
キエルケゴールが『死に至る病』の中で、「自己に絶望すること、絶望して自己自身を抜け出そうと欲すること、これがあらゆる絶望の定式である」というが、西田の苦悩は、この「絶望の定式」に当てはまるものであつた。だが、彼の生活の悲惨、病氣、困窮、艱難、災厄、苦悩、痛恨がどれほどのものであれ、彼は、それら苦悩それ自体に絶望するのではない。彼にとって、絶望していない悲惨や困窮だつてあるのだから。西田幾多郎という人物が、どこまでも「絶望の定式」の中にあつたとすれば、彼の生身が引き裂かれ、進む鮮血に血塗られた裂け目の中で、呻き声と共にある己の姿であつた。彼が抜け出そうとするのは、そうした「絶望」（Ver-zwei-flung）している自己自身である。

若き幾多郎は、彼の父、西田得登^{ヤスノリ}の自己破滅的な行状に苦悩するのであるが、しかし、そのこと自体に絶望しているわけではない。団欒すべき彼の家庭の中で、家庭それ自体が反目し合う父と母とに引き裂かれ、また、同一たるべき己の心の中で、父への思いが引き裂かれてゆくのである。こうした事態、どうにも癒し難い己

の心の亀裂や裂け目にこそ、彼は絶望しているのである。また、京都時代の西田は、長男を彼の旧制三高卒業の年に失うのであるが、その死に慟哭し生涯悲しみを忘れ去り得なかった。忘れ去るべき面影に苦悩するというより、己のうつろな心に絶望するのである。また、どうしても禁煙できないならばこの害に苦しむが、その苦しみ方は、どうみても尋常とは思われないものがあった。彼の苦悩は、ニコチン中毒の害とか、禁煙できない己の意志薄弱さにあったというより、むしろ、彼の絶望にこそあった。彼の心が愛煙と禁煙との狭間にゆらぎ、引き裂かれゆくのを直視するとき、彼は、その心を許し難いのであった。かくして、彼の鬼気迫る熾烈なまでに厳しい座禅も、哲学の営為も、学問のすべても、己の心の有り様を、根源的生活態度を、基本的にしっかりと立て直すこと、「ライフ」を徹底的に熟視すること、それらのことに連携するところから発するのである。

若き西田の家庭事情 父との関係から

西田家が決定的に没落するのは、明治25年9月、幾多郎23歳、東京文科大学選科生2年生の新学期草々の頃である。幾多郎の父、得登は、金沢近郊の森村の戸長を長年勤めた大庄屋であったが、米や株相場に次々に手を出し失敗に失敗を重ね、親戚等からの巨額な借財を抱え、その返済に苦しみつつ、ついに破産に至る。西田得登は、更に、結婚前から隠し子があつたり、結婚後も女性問題の絶えない身持ちのよくない人物であつたらしい。周囲にお構いなく自分の我を押し通すような性格であつて、幾多郎の母、寅三からも愛想をつかさされ、日頃の生活の乱れから、また、次第に役場や村人たちからも信用を失い、人間的にも荒んでゆくことになる。かくして、遂には、父祖伝来の土地、宇ノ気の家屋敷を離れざるを得なくなるのである。その結



果、西田家の没落は、決定的となる。上田久氏は、彼の著書『祖父西田幾多郎』の中で、「これが、幾多郎が生涯を通じて、家庭の不幸に苦しむ始まりであった」(9頁)と書いておられる。

「家庭の不幸に苦しむ」というより、決定的にダメージを被ったといった方が適切であるだろう。こうした父の諸行や、家庭内での絶え間ないいざこざは、幾多郎の性格形成に暗い影を落としたのであった。当時の家庭事情は、「幼い頃の明るい無邪気な幾多郎少年を、暗い物思いに沈み込んでいくような寡黙な少年に変えていった」(同上, 21頁)といわれている。若き幾多郎の苦悩は、単に、長男として没落した西田家の家名再興への願いや経済的な苦勞にだけあったのではない。それどころか、或る種の屈辱感に苦悩する。彼は、多分、「暗い物思いに沈み込む」性格も災いしてのことだろうと思うが、校則を蔑視し「独立独行で途を開いてゆく」などと生意気に考えて、第四高等学校を中途退学する。当時、こうした落伍者には、大学受験資格などなく、進学しようと思えば差別待遇を承知の上で選科生になるしかなかった。大学では、図書館の利用、指導教官の指導などに際して、本科生とは差別され、選科生としての酷い屈辱感を味わうことになる。かくして、彼は、東京文科大学卒業後、望ましいよい地位への就職口を諦めなければならなかった。だが、彼の心は、諦めきれずにいく度となく彼のいう「卑劣の念」(功名心)と「自戒の念」(良心)との葛藤の狭間に引き裂かれつつ、空しく大いにゆらぐこととなる(同上, 112頁以下「参禅」参照)。

幾多郎は、結婚をして自分の家庭をもつようになって、更に父との関係での苦悩が一層深まってゆくように思われる。それは、実際の親子関係で悩んだばかりではなく、父、得登から受け継いだ血筋からくる不安であった。ひとつ

の事例は、幾多郎が男女の關係に異常なまでに神経質であったということである。たとえば、彼の息子たちが、同じ屋根の下で生活していた従姉妹(幾多郎の弟、憑次郎の娘、敏子)の部屋を挨拶に一寸覗くことさえ厳しく咎めたり、娘たちの住み込み家庭教師兼家事手伝いの女性(上野麻子)は、幾多郎の次男外彦とやがて結婚する仲なのに、住み込みでありながら同じ屋根の下には置けないと、妙心寺の僧房に隔離させられたりした。父ばかりでなく、幾多郎の大姉、正も、あまり身持ちのよくないお人であつたらしく、三度も結婚に失敗したり、四高の学生を誘惑したとかで悪い風評もたつようなことがあって、なるほど幾多郎が潔癖症になるのも頷けないわけではないが、しかし、その潔癖ぶりは、とても尋常とは思えない。彼の心の底では、おのれの家系を流れるそうした忌むべき血筋への不安は、多分、消えなかったのではないかと思う。幾多郎自身、みずから認めているように、父の血筋を引き、父の性格を多く受け継いでいるという。さもなければ、かくまでに潔癖ではいられなかったに違いない。父を想うとき、情念の奔放と制御、肉欲と潔癖との間にゆれ動き、彼の内面的葛藤はいかばかりであったかと思う。彼は、常にその葛藤と絶望的に戦っていたに違いない。

父について、幾多郎は、西田家に伝えられている『過去帳』の中で、次のように書いている、「父、名八、得登、幼名八藤蔵、祖父新登^{アラノリ}ノ末子、天保5年4月生。明治31年10月9日、余、山口高等学校二在職中、肺炎ヲ病ミテ金沢市堅町ノ家ニ没ス。享年65。父、身長通常、^{背ヤ}背稍カガミ、眼鋭ク鼻高シ、性淡泊ニテ、雷雨一過痕ヲトドメザルノ風アリ。思ヒタチシ程ノ事、貫カザレバ止メズ。深く意ヲ我等ノ教育ニ用ユ。我等今日アルハ一ニ父母ノ力ニヨルト言フベシ」と。ここに「金沢市堅町ノ家」とあるのは、父の妾宅のことである。幾多郎にとって、家長

としての父、得登は、否むべき人物でありながら、それでもやはり恩讐を超えて敬うべき人物でなければならなかった。幾多郎が彼の父にて経験したところの、容認できないところのものを容認せねばならぬといったアンビヴァレントな気持ちは、やがて哲学的な表現が与えられることになる。

京都大学時代の西田の家庭事情 「伏魔殿」

幾多郎の次男、外彦の妻、麻子は、かつて外彦の甥上田久氏に「西田家は伏魔殿だよ」と言ったそうである（『続 祖父西田幾多郎』87頁）。京都の田中飛鳥井町に大正11年に新築した西田幾多郎の家が外から入ったひとから見ると、悪魔の潜む殿堂のように思われたのはなぜか。外彦が結婚した大正13年6月、当時、脳出血で五年間も病床にあった幾多郎の妻寿美が夫の書斎の隣室に寝込んでいたばかりではない。孫たちに「ねんねのおばあちゃん」といわれるようになる幾多郎の大姉正が奥の間で寝ていた。そればかりか、当時、三女静子は肺結核で、四女友子、六女梅子は、腸チブスの後遺症でやはり寝たり起きたりしていたらしい。一燈園からの奉仕活動、特に物井花という人物によって献身的に家事は営まれていたようであるが、麻子は、六年間も主婦のいなかった大家族の主婦となり、嫁として西田家で思いがけない事柄をいくつも体験したに違いない。彼女のたいへんな苦労は、想像に難くない。伏魔殿といいたい気持ちも分かるというものである。幾多郎にしても、当時、学究を妨げられる暗黒の家庭生活に苦悩していた。

大正7年、最愛の母を失い、翌、8年、妻倒れ再起不能となり、翌、9年、二十三歳の長男謙に先立たれ、翌、10年、三女静子肺を病み入退院を繰り返す、ついに妻寿美と頭を並べて病床についてしまう。更に、翌、11年、四女

友子、五女、梅子共々入院、とくに友子、後遺症ひどくそれ以後廃人同様になってしまう。そして、ついに14年一月半過ぎ、妻寿美帰らぬ人となる。十九歳で母貞の姉の子幾多郎と結婚し、夫婦の間ではなく、どうも義父得登が障害になってのこらしいが、一度は離縁しながら、義父の死後再びよりを戻し、二人の男子と双子を含む六人の女子（その内二人、幽子と愛子は夭逝）を生み育て、志半ばにして無念の四十九年間の生涯を終わったのである。幾多郎は、1月25日の日記に「三十年生を共にしし彼女は小壺中の白骨となって帰り来る」と書いている。大正6年長女弥生は、御茶の水女高師を卒業し、京都に帰って同志社の小学校に奉職することになるが、その頃のことを回想して次のように書いている、「六人の兄弟が丈夫で揃って、あの頃はとても賑やかであった。恐らくは、両親にも私達兄弟にも家庭的には一番楽しかった時代だったかも知れない」（『わが父西田幾多郎』アテネ文庫・44頁、上田弥生「あの頃の父」参照）と。確かに、その翌七年、幾多郎の母寅三が他界する頃を境に、つぎつぎと西田家を予期せぬ不幸が襲うことになる。大正十四年、妻の死までの七年間、幾多郎にとって家庭生活は、彼の人生でも最悪の時期であった。そのときのやるせない彼の思いは、この時期に多く創作せられた短歌の中に垣間見ることができる。

長男謙は、大正9年6月11日に帰らぬ人となった。腹膜炎がこじれ心臓内膜炎を起こしたのである。その6月には、三高を卒業して、京大の角帽をかぶるはずであった。それまで、短歌などあまり作らなかった幾多郎であったが、これを機に以後この時期多くの歌を残している。特に、謙の死は、容易に忘れ去り得なかった。幾度も夢ではないかと思ったに違いない。「すこやかに二十三まですごし来て夢の如くに消え失せし彼」。そして、幾多郎の夢に、また、いく度となく執拗に生き返ってくるのである。

「死にし子と夢に語り冬朝さめての後の物のさびしさ。この歌は、やがて、「死にし子の夢よりさめし東雲の窓ほの暗くみぞれするらし」と読み替えられる。最愛の息子の、夢の中の生にもとどまり得ず、うつつの中の死にもとどまり得ず、西田はどれほどの苦悩を味合ったことだろう。その苦悩は、何処にも落ち着くところのない「物のさびしさ」と歌われている。だが、西田の苦悩は、夜明けの向こうに、「みぞれするらし」と**声なきものの声を聞く力**へと転じてゆく。そのとき、すでに「東雲」を感じ取っていたのだろうか。

大正11年の、つぎつぎに家人が病魔に侵されてゆく頃の歌に、「妻も病み子等亦病みて我宿は夏草のみぞ生ひ繁りぬる」、「運命の鉄の鎖にひきずられふみじられて立つすべもなし」、「人の世の楽しき春をよそに見てとけんともなき我心かな」、「しみじみと此人生を厭ひけりけふ此頃の冬の日のごと」、「詩や歌や哲理の玩具くさぐさとわれとわが身をなだめても見る」、「子は右に母は左に床をなべ春はくれども起つ様もなし」、「かくしても生くべきものかこれの世に五年こなた安き日もなし」といったやり切れない悲愴感の漂う歌が多い。この世に春が来ているのに、我が家には来ていない。春が来ているところにも立てず、来ていないところにも立てない。そのいずれにも立つ瀬がない、立つすべもない、身の置き所のない、無念やる方のない、そうしたやり切れなさに、幾多郎は、絶望していた。こうした彼の歌に混じって、「かにかくに思ひし事の跡たえて唯春の日ぞ親しまれける」とか、「我心深き底あり喜びも憂の波もとどかじと思ふ」とか、「愛宕山入る日の如くあかあかと燃し尽さん残れる命」とか、超越した心境が同時に歌われている。生活への絶望がここでは一転して、「跡たえて」とか「深き底」とか「燃し尽さん」とか、いずれにも囚われず固執しない突き抜けてゆく心の中

に、形なきものの形を見ている。すべてを内蔵しても、**なお底深く広がる魂の開け**を感じている。魂の癒しがあるとすれば、その静謐なるところをおいてない。心の苦悩を癒すべく歌が歌われているのである。自己の中に自己を映すとき、その映しが歌となるのである。歌を通じて、すべてを**ありのままに静かに映す鏡の所在**が自己の中に確認されている。

われわれの驚きは、西田の家庭生活が彼の人生上最悪であったと思われるこの時期に、もっとも豊かで充実した研究業績を数多く残しているという点である。彼の地位を不動にした代表作『働くものから見るものへ』のほとんどの論文が、この時期に集中的に完成している。その中の論文『働くもの』が大正14年10月、同じく論文『場所』が大正15年6月、それぞれ『哲学研究』に発表されたのであった。左右田喜一郎(東京商科大学、現一橋大学に籍を置き、京大哲学科で集中講義を行った)は、西田のこの時期の業績を、『西田哲学の方法について』という論文(『哲学研究』大正15年10月)の中で、次のようにきわめて高く評価した。「西田博士は『働くもの』および『場所』の二論文において、既に一個の体系を備えたといひ得べき境地に踏み込まれた」と。それは、続けて次のようにいう、「此の論文の内に現れたる思想は、所謂『学古今を貫き、識東西に互る』といはるべきもので、此等の諸思想、諸学説、諸体系を自家菜籠中のものとなして、別に一個独自の境地に進み入られたのを見るは、余をして尊敬の念を深くせしむるのみならず、個人的には先輩の友人として博士の為め祝辞をすら述べたいと思ふ。泰西の文物を入れて既に数十年、今にして漸く一西田博士を得た事は、我が哲学界の為め誠に慶事といはねばならず、又誇るに足るといはねばならぬ。余は、既にその学説を呼んで博士の名を冠して『西田哲学』と称するに値する程その体系を整へたるものありと考へ

る」と。西田にとって、これ以上の賛辞はなかった。「私は近頃始めて理解あり権威ある批評を得たかに思ふ」といって率直に喜んでいて。それにしても、当時、西田の晦渋な論文をこれほどまでに適切に評価し得た左右田博士の力量にも感服する他はない。

西田独自の境地 論文「働くもの」 及び「場所」が示すもの

西田が乗り越えるべく努力した最大なる目標は、キエルケゴールのいう「絶望の定式」であったといっている。「死に至る病」は、死んでも死に切れない死に直面して、死ぬことも生きることでもできない病いのことである。たとえば、西田の場合、最愛の息子は、**死んでも死に切れていないのである**。彼の息子は、**夢の中の生にもとどまり得ず、現の中の死にもとどまり得ず**、生きることはもちろん、死に切ることもできなかった。西田は、そのことで非常なる苦悩を味合っているが、この苦悩を逃れるのではなく克服したかったのである。いずれの立場にも立ち得ないのは、生と死が絶対的に矛盾しているからである。苦悩の最大なる原因は、こうした**絶対的な矛盾の中にある**といわなければならない。そのいずれにも立つ瀬がない、身の置き所がなくなるとき、西田は、慟哭して「立つすべもなし！」（西田の和歌「運命の鉄の鎖にひきずられふみにじられて立つすべもなし」）と叫ぶのである。そして、この時はじめて覚悟するのである。ここでの解決は、この「矛盾の統一」以外にはないのだ、と。しかも、そこでの絶対的な統一は、キエルケゴールのいう「逆説弁証法」でもまだ生温いと思われたに違いない。キエルケゴールの立つ瀬は、矛盾のまま「神の前に立つ」ことであったが、いまだ神と人間との隔りが残るのは、彼の信仰がキリスト教である以上やむを得ない。しかるに、西田の絶望は、

助けを求めるべきその神も彼にはいなかったのである。彼における絶対的な矛盾の統一を、神に助けを求めないという意味では実に徹底していた。

論文『働くもの』の中で、西田は次のように書いている。「私は此に概念の矛盾といふことに就いて考えて見よう。相異なれるものを區別するには、そのこの両者を包む一般概念がなければならぬ。相異なれるものは、一方に於いては相同じきものでなければならぬ、之によって一般と特殊との體系も成立するものである。矛盾は相異の極致である。二つの概念がお互に相矛盾すると考へる時、亦此両者を包む何等かの客観的統一がなければならぬ、之によって二つの概念が矛盾すると考へられるのである。此の如き客観的統一は、**単に特殊を包摂する一般概念という如きもの**ではない。或る一つの概念に矛盾する概念を考へるには、我々はこの概念を越えて外に出なければならぬ。相矛盾する概念を統一するものは、**自己自身の否定を含むものでなければならぬ**」（岩波版『西田幾多郎全集』第四巻、190頁）（強調筆者）と。

ここにいう一般概念の「外」とか、「この概念を越えて外に出る」とかの「外」の意味については、十分に留意しなければならない。丁度、蟬が羽化するように、単に抜け殻の外へ出るといった意味に理解してはいけぬ。内とまったく関係ない外の世界に出るというのではなく、内在しながら超越することである。さもなければ、そこで統一とか自己同一とかいえないし、そもそも矛盾は矛盾でなくなる。矛盾のまま統一され、自己同一であるためには、矛盾の内在は解消できないからである。だから、「自己自身の否定を含むもの」という言い方になる。このことは、外であることが内であり、否定することが肯定することである。したがって、「無にして有を成立せしめるもの」「概念の生滅するような場所の如きもの」（同上、192頁）と

いわれる。その箇所をそのまま引用してみよう。「相矛盾する二つの概念に至っては、之を統一するに所謂類概念を以てすることもできない、又、その背後に物といふ如きものを考へることもできない。縦、時の考を入れても、一つの物がその矛盾せるものに移り行くと言ふのは消滅といふことでなければならぬ。矛盾概念を統一するものは、生物の死することが生れることである如く、否定することが肯定することでもあるものでなければならぬ、概念の生滅する場所の如きものでなければならぬ、無にして有を成立せしめるものでなければならぬ。」(同上、191 - 192頁)

以上は、「概念の矛盾」における矛盾の統一についての考察であるが、それでは、「自己の矛盾」については、一体、どうなるであろうか。自己の矛盾が明らかになればなるほど、矛盾の統一を求めて、概念の矛盾の場合と同様、自己を肯定すると共に否定するものとなる。自己超越は、自己肯定も自己否定もそのまま映すことのできるような「鏡」となるのである。西田はいう、「・・・外にも内にも総合的中心といふ如きものがなくならねばならぬ、単に自己の中に自己を映す鏡の如きものとならねばならぬ。かかる鏡に於いては、映すことは構成することであり、構成することは映すことである」(同上、194頁)(強調筆者)と。このような自己において、「真に自己が自己を映す自己同一の対象界は、自己矛盾の対象界でなければならぬ。自己同一が深くなればなる程、自己矛盾が明となり、自己矛盾が明となればなる程、自己同一が深くなる」(同上、193頁)といわれる。この「鏡」は、言い換えて、「自覚の鏡」といわれる。この論文の最後の方では、「自己の中に自己を映す自覚の鏡」(同上、206頁)という言い方になっている。この曇りなき鏡は、「自覚」においては、「絶対の無」という言い方しかできないようなものである。「意識は互に相

否定することによって成立し、我々の意識の底は絶対の無に通じて居る」(同上、207頁)という。ここでの「意識の底」とは、先に紹介した西田の和歌、「我心深き底あり喜びも憂の波もとどかじと思ふ」の「深き底」である。これは、次の論文『場所』ではやがて「意識の野」といわれるようになるのだが、この「野」こそ、彼の中核的思想「場所」となるものであった。

西田の中核的思想「場所」

野心作『場所』は、『働くもの』の三倍の分量もある四百字詰め原稿用紙で百五十枚に及ぶ論文である。主題「場所」という言葉は、プラトンの『ティマイオス』からとられたという。我というものが非我というものに対して考えられている以上、我と非我との対立を内に包み、所謂「現象界」を内に成立せしめるものがなければならず、そのように一切の「アイデア」を受け取るところを、プラトンは「場所」と言ったというのに由来するらしい。プラトンのいう場所は、いわば映像が映されるスクリーンのようなもので、どこまでもパシーフである。だが、西田のいう「場所」は、これとまったく関係ないわけではないが、生ける鏡のようなものであって、きわめてアクチーフである。そこには、<理念の哲学>と<自覚の哲学>の相違が示されている。確かに、西田でも、「映される場所」などといわれていて、恰も、それ自体無自覚なスクリーンに、映画でも映すような思わせぶりがないでもないが、けっして誤解してはならない。これは、どこまでも深い自覚の有様をいっている。自覚とは、スクリーン上の映像のように、時々刻々たゆまず移行行く意識現象をいうのではなく、むしろ、けっして移行行きのない「意識の野」の如きものをいう。だが、「野」の広がり空間ではない。移行行く時間でも広がり空間でもないとするれば、それは、

一体、何であるか。時空がそこで成り立つような「自覚」とは、いわばそこで時間と空間とが交差している〈縁〉の如きものである。西田は、そこを「無の場所」とか「永遠の今」とかいう。これらは同じ所を表現して、時空ではなく、時空交差（時空の〈縁〉それ自体は時間でも空間でもない、だが時間も空間もそこから創発）する所である。意識は確かに時空に従うけれども、だが自覚は時空交差に従うのである。西田では、〈縁〉のところを「野」といったのである。こうして、われわれは「意識」と「意識の野＝自覚」との決定的な差異性について知るところとなる。「意識の野」とは、いかなる意味でも、所謂〈無意識〉というものではないのである。

時空が時空交差に於てあるように、自覚とは意識の「於てある場所」のことである。その場所でこそ、自覚が創発せられ自己意識の影のすべてが映される、その影を映す作用が自覚といわれる。だから、意識の野は、場所としての鏡として捉えられる。西田はいう、「所謂意識も之に於てあると考へるならば、眞の場所は自己の中に自己の影を映すもの、自己自身を照らす鏡といふ如きものとなる」（同上、226頁）と。場所としての鏡は、意識が知識の対象界にのみ関わるものであれば、「情意の成立する場所は更に深く広い無の場所ではなければならない」（同上、225頁）といわれる。そのように、意識における知・情・意によって、深くも広くもなる。「此故に我々の意志の根柢に何等の拘束なき無が考へられるのである」（同上、225頁）。このことから、自覚とは、どこまでも深く広い無の場所であることが知られる。そこで一切が有りのまま映される。「映すとはいふことは物の形を歪めないで、その儘に成り立たしめることである。その儘に受け入れることである」（同上、226頁）ということになる。

こうして、西田は、長男謙を、夢の中では生

きた儘の彼として、現の中では死んだ儘の彼として、その儘に受け入れたのである。そして、夢も現も届かない彼の深い心は、まったく揺らぐことはなかった。深き底＝場所としての鏡となり、その儘を映すことになったからである。

むすび

西田の思想形成には、彼の生活や家庭の事情との関わりを見過ぐすことはできない。よくいわれる西田哲学の難解さとは、普段気付かない所で閉じているわが心を自覚的に開く事態に関わっていたが、気付けない所に気付いてゆくのは、至難の業であった。この至難の業が、そのまま西田哲学を難解にしているのである。そこで、実際問題として、西田自身自らの心をどのようにして開いていったのかを彼のライフヒストリーの中に見てゆくことにした。その具体的な事例を、ここでは二つ取り上げて再確認することにしよう。

ひとつは、若き西田と彼の父親との関係にまつわる事例である。父親の女性関係から被る母親の苦悩を見つつ両親の間に引き裂かれてゆく己の姿、借財の重みに耐え切れず破綻してゆく西田家の運命に翻弄されてゆく己の姿、西田は、そうした己の現状を乗り越えるべく、その力を禅の思想に求めてゆくのである。もうひとつは、壮年時代の家庭事情に関わる事例である。彼は、妻や家族の度重なる病氣、可愛い娘の重篤な障害、手塩にかけた長男の若死、そして最愛の妻の死に遭遇し、意気沮喪する。その災禍の中で、彼は懸命に生きる力を振り絞る。それは、西田の場合、そのまま哲学の中で生きることに他ならなかった。西田の「矛盾の自己同一」とか「絶対無の場所」とかの思想は、この中から生まれたものである。哲学とは、彼にとって、乗り越えるべき力を付与すべきものであった。西田幾多郎の生き様の中において、彼のライフヒ

ストーリーと思想形成の間には明らかに相関関係が認められるのである。

所謂「西田哲学」と称されるものの特質は、もちろん、思想それ自体として理解できるものでなければならない。だが、従来、抽象的で難解とされた彼の思想を思想だけで、哲学のための哲学としてよりも、彼の固有なる生き様、特異な生活体験などの具体的な生の事例に即応しつつ学習し理解することの方が、われわれの哲学研究に際して、むしろ方法論としてより一層適切なのではないか。このライフヒストリーの方法は、学生達の哲学学習に際しても、より一

層効果的であるだろうと思われる。というのは、生々しい現実的な生活事例により親しむことをもって、学生諸君は、哲学思想とはいかなるものであるかを学ぶことになるからである。

[了]

テキスト

岩波版『西田幾多郎全集』1969 特に第四巻

上田 久『祖父西田幾多郎』(南窓社)1978

上田 久『続・祖父西田幾多郎』(南窓社)1983

2002年、盛夏。

(2002.12.17. 受理)